

News Letter

奈良女子大学 大和・紀伊半島学研究所

東吉野村×大和・紀伊半島学研究所 連携シンポジウムの報告 【保 智己】

奈良女子大学大和・紀伊半島学研究所は2019年11月23日（土）に奈良県吉野郡東吉野村において、東吉野村、奈良女子大学共生科学研究センター及び紀伊半島研究会との共催で「紀伊半島にみる自然と共生－二ホンオオカミを育む森－」と題したシンポジウムを開催いたしました。

紀伊半島の北東部に位置する東吉野村は豊かな自然環境に恵まれ、質の高い木材を産出するとともに二ホンオオカミの最後の目撃地として有名であり、本研究所も本地に研究拠点としての分室を設置しています。

本研究所は奈良盆地と紀伊半島について自然科学的研究、人文科学的調査研究、社会科学的研究といった多角的な視点から、環境・歴史・地域社会について総合的な研究を行うことで未来日本のあるべき姿を社会に発信するとともに、研究機関に所属する研究者のみならず研究機関に所属せず地域に根付いた研究を行う人たちが利用できる共同利用施設を目指しています。その一環として、設立された2018年から、地域と連携したシンポジウムを開催しています。そこで、今年は分室のある東吉野村との連携シンポジウムを企画いたしました。

冒頭、私（大和・紀伊半島学研究所長、共生科学研究センター長）と水本実氏（東吉野村長）の開会挨拶に続き、谷田一三氏（大阪府立大学 名誉教授）から東吉野村における川



総合討論の様子

虫研究の歴史や内容についての講演がありました。その中でこの地域が河川研究の拠点であり、背景には奈良女子大学が中心になっていたことが紹介されました。次に松井淳氏（奈良教育大学 教授）から紀伊山地における二ホンジカの食害に対する森林の保全対策について、藤平眞紀子氏（奈良女子大学 准教授）から吉野材（スギ、ヒノキ）の魅力について講演が行われました。続いて、石黒直隆氏（岐阜大学 名誉教授）から二ホンオオカミの研究について講演がありました。最後に、上記講演者に私と和田恵次氏（紀伊半島研究会 会長）、司会進行を務めた片野泉氏（奈良女子大学 准教授）を加えて総合討論が行われ、会場内で活発な意見交換が行われました。

本シンポジウムは研究者のみならず地元東吉野村の住民や県内外から多くの一般市民の参加があり、東吉野村を含む紀伊半島の自然や文化、生物等に対し、高い関心が寄せられていることが分かりました。

昨年度、大淀町で郷土研究者に関連するシンポジウムを開催したことに続き、今年度は東吉野村で紀伊半島における自然と共生に関するシンポジウムを行えたことは、大和・紀伊半島学研究所の目的の達成に資するものとなりました。

TOPICS

- ・ 東吉野村×大和・紀伊半島学研究所 連携シンポジウムの報告
- ・ なら学研究センターの紹介（なら）
- ・ 共同研究の紹介（なら）
- ・ なら学研究会活動報告（なら）
- ・ 着任の挨拶（共生）
- ・ 東吉野村野外体験実習報告（共生）
- ・ 第15回若手研究者支援プログラムの報告（古代）
- ・ 研究会「東大寺大仏殿の再建をめぐる」の報告（古代）
- ・ 聖地学・古代学の活動報告（古代）

なら なら学研究センターより 【寺岡 伸悟】

今年度、なら学研究センターは3年目となりました。1年目は組織の立ち上げに時間を費やしたので、通年で活動できたのは今年度となる3年目です。本センターでは、奈良の個別性と一般性の両方に留意し、現代的視点から研究に取り組んできました。

もともと、この「個別性と一般性（または普遍性）」という概念は、本センターの前身、文学部なら学プロジェクト時代の研究会で招請した方達との議論から生まれたものです。

その一人は、思想家の谷川健一氏です。奈良とは何かをテーマに本学で開催した講演会において、谷川氏は、奈良県という場所は、中心（かつての都）とそれを取り囲む周縁地域の二つからなっている「十全な」場所であり、それは一種の世界観を形成していると語られました。たしかに奈良県は奈良盆地という平坦部とその東と南に大和高原や吉野山地を抱える構造です。北部はサラリーマン、中部は工業・農業、南部は林業と、中心と周縁、都市と農村という、日本各地にもあるような一般的・普遍的な「かたち」があり、それらがつながってこの地の社会システムはまわってきました。

しかしそのつながりが弱まったことで、それぞれの地域が社会問題に直面しています。例えば、南部の林業の停滞や過疎化と、中北部の事業所数や宿泊観光者数の少なさは関係しているのではないかと。こうした捉え方がすでに「なら学」であり、またそれは課題解決のための道筋を暗示していると思うのです。つまり個々の事象をもう少し大きな（しかし国家レベルとまではいかない程度の）社会システムの枠で見ることで、それが同時に全国各地、さらに近い将来低成長期に入っていくであろうアジア諸国の社会課題の捉え方（＝ひとつの解決の道筋）のヒントにもなる、と考えるものです。

他にも、私達に大きな示唆を与えてくれた人は挙げきれません。その多くは、在野の方々です。そうした方々となら学研究センターのつながりは、年々太く広がっています。例えば、果樹地帯の高齢化に学際的に取り組んだ私達の社会技術開発（らくらく農法プロジェクト）は、すでに共同研究の舞台でありステークホルダーである吉野郡下市町の人々に引き継がれ、いまは全国からの多数の視察に追われていらっしやいます。私たちスタッフも、JST（国立研究開発法人 科学技術振興機構）から紹介をうけた韓国の政府系機関が、視察で下市町を選択した際（2019年5月）、現地に赴き、農家や地元企業の社長と一緒に案内しました（写真）。



韓国からの視察

また、本センター水垣源太郎教授（社会学）が奈良県地域振興部と行っている社会技術共同研究（過疎地にシェアオフィスを新設した際に新しい仕事ネットワークなどが生まれる効果を評価する研究、社会技術研究です）、さらに磯部敦准教授（出版研究）が「なら学研究会」をベースとして行なう民間研究者のネットワーク研究や関連資料の撮影・データベース化作業（文学部らしい「意味生産学」です）は、奈良という「個別性」と、それに止まらない「一般性・普遍性」を持ち合わせた研究だと思えます。それぞれ、今号にその概要を書きいただきました。

なら学センターは、こうした研究に加えて、産官民様々なセクターからの問い合わせや調査・社会課題解決依頼にできるかぎり応えようとしています。社会貢献と研究を分ける考え方自体がすでに過去のモノとなり、社会介入型研究と言われます。本センターは、研究所内の自然系と歴史系の2つのセンターを媒介しつつ、地方の大学の研究センターのモデルたれるように、精進していきたいと思えます。

なら 共同研究の紹介 【水垣 源太郎】

2019年10月より本学と奈良県との共同研究「奈良県南部におけるコミュニティ開発の拠点形成と人材蓄積過程」を進めています。

日本が人口減少に転じた2000年代以降、全国各地でコミュニティ開発の拠点形成が行われています。その背景には、長期的な少子高齢化や都市集中の趨勢に加えて、経済低迷や人口ボリューム層の大量退職などのイベントが重なり、コミュニティの衰退が誰の目にも明らかになってきたことがあります。このことは奈良県南部の中山間過疎地域である吉野エリアにおいても深刻な問題となっています。

消費や教育、医療、防災といったコミュニティでの生活を持続可能にするためには、定住人口と地縁型組織に依存してきた従来のコミュニティのあり方を変えなければなりません。定住人口のみならず二地域居住などの関係人口や観光などの交流人口を含めた全体を考えて、コミュニティ生活に能動的に関わるアクティブ層あるいは活動人口を増やす必要があるのです。そのための地域内外の人々の交流や協働の場がコミュニティ開発拠点です。このコミュニティ開発拠点には、コワーキングスペースやシェアオフィス、カフェ、

書店、図書館、温浴施設やコインランドリーなど、既存の施設を利用したものから、廃公共施設を改造したものまでさまざまなものがあります。

この共同研究では、2015年度以降活動を開始した奈良県南部の3つの拠点を事例としています。デザイナーの移住者が先導する東吉野村の「オフィスキャンプ東吉野」、住民が地域内交流のために立ち上げた吉野町の「三奇楼」、廃公共施設を活用した下北山村の「下北山BIYORI」です。

これらの各拠点には訪問者やイベントの記録が残っています。そこから社会ネットワーク・データを再現し、拠点関係者へのインタビューに基づいて各ノードの属性情報を付加していきます。それらのレイヤー構造や時系列的变化を分析することで、拠点ごとの発展経路やその適切な評価法がわかります。それによって拠点の持続や発展に必要なサポートの種類およびその投入のタイミングが明らかになるものと期待しています。



なら なら学研究会活動報告 【磯部 敦】

なら学研究センターの活動は大きく、(1) 奈良・大和の研究者ネットワークや研究の再評価を行う〈なら学研究〉部門と、(2) 地域社会の課題解決・活性化を実践的に研究する〈社会技術開発部門〉の二つから成り立っています。なら学研究会は、(1)の目的のため、学外の在野の様々な方たちとともに議論や調査を重ねている開かれた場です。2020年の2月で28回目の研究会を迎えます。

なら学研究会

なら学研究会では、「なら」を多角的に検証すべく、設定テーマにもとづいたゲストスピーカーをお招きして研究会を開催しています。

このほか、2019年5月には奥村隆彦氏（近畿民俗学会名誉会員）をお招きし、奈良県出身の小児科医・民俗学者である澤田四郎作についての小規模な勉強会を開催しました。また、今年1月26日（日）には藤影堂での研究会を開催したほか、今後は算額などのテーマを考えています。

研究会等の告知、および開会後の印象記など詳細については、なら学研究会ウェブサイトで公開しています（<http://narastudies.hateblo.jp/>）。あわせて参照ください。

澤田四郎作研究

なら学研究会では、奈良県五位堂出身の小児科医・民俗学者である澤田四郎作（1899～1971）について重点的に研究しています。その理由として、澤田が大阪民俗談話会や近畿民俗学会の創設と運営をとおして宮本常一をはじめとする後進の育成に尽力したのみならず、そのマネジメントが柳田国男や渋沢敬三、また各地方の民俗研究者や趣味人たちとの交流のうえに成り立っていたこと、そして澤田が大阪玉出に開業してからも奈良県郷土研究とつながりを持ち続けていたこと、です。前者におけるつながりは、民俗学から郷土玩具、短歌、考古学など領域横断的に形成されたもので、専門分化した現在のアカデミズムを相対化する一つの視点を提供すると考えられます。後者は、奈良を多角的に検証しようというなら学研究会の目的に鑑みると、奈良を内と外から見る視点を持った澤田はきわめて重要な位置にいると判断できます。

澤田四郎作の旧蔵書籍や資料類は、現在、大阪大谷大学図書館澤田文庫、遠野市立博物館、宝塚澤田家（四郎作長男宅）に残っています。本研究会では、2015年8月26日（水）、2016年3月10日（木）に大阪大谷大学澤田文庫の、2016年7月25日（月）に宝塚澤田家の、2016年10月29日（土）・30日（日）に遠野市立博物館の訪問調査をおこないました。2016年には奈良女子大学研究推進プロジェクトに「郷土史研究者の人的ネットワーク解明のための基礎研究——奈良県出身・澤田四郎作旧蔵史料の調査と分析」が採択され、調査のほか史料撮影をおこないました。2017年3月4日（土）には澤田四郎作の生家である澤田酒造株式会社（五位堂）を訪問し、澤田本家六代目当主の澤田定至人氏への聞き取り調査をおこないました。こうした調査等で得た知見をまとめ、2017年4月には「澤田四郎作年譜・著述等目録」を作成し、なら学研究会ウェブサイト上で公開しました。2017年7月にはなら学研究会編になる研究パンフレット『「知」の結節点で 澤田四郎作 人・郷土・学問』を頒布し、ウェブサイトでもPDF版を公開しました。



上記のほか、なら学研究会ウェブサイトでは澤田四郎作著作の目録や序文をテキストデータで公開し、郷土研究、民俗学研究等を活かせるような環境づくりをおこなっています。

なお、なら学研究会の研究成果をふまえ、澤田四郎作に関しては私が次のような成果を公開しています。

1. 「澤田四郎作の営為―澤田文庫調査から見えてきたこと」
(京都民俗学会における口頭発表、2017年9月28日)
2. 「澤田四郎作のこと」
(『奈良女子大学日本アジア言語文化学会報』61号、2017年11月)
3. 「澤田四郎作の検閲意識」
(内務省委託本研究会での口頭発表、2018年8月24日)
4. 「翻刻 澤田四郎作『日誌』(昭和8年分)」
(『なら学研究報告』1号、2019年5月。本学大学院生の汪少雯・小泉紀乃との共著)
5. 「麻生路郎と澤田四郎作―川柳塔電子化事業の意義とともに」
(『川柳塔』1111号、川柳塔社、2019年12月)
6. 「澤田四郎作『日誌』における「記録」の累積と循環」
(『叙説』47号、奈良女子大学日本アジア言語文化学会、2020年3月刊行予定)

『なら学研究報告』の創刊

2019年5月、なら学研究センターは機関紀要『なら学研究報告』を創刊しました。奈良を多角的に検証する「なら学」に関する研究論文や諸史料の紹介等をおこなうもので、次のような特徴があります。

- ①字数の上限を設定しない。
- ②締め切りを設定しない。
- ③1号1論文の不定期刊行。
- ④ウェブジャーナル形式とし、紙媒体は発行しない。

①は、大部の構想や大部の資料を1号のなかで掲載することを可能にするための措置です。そのため、②のように締め切りを設けず納得のいくものを掲載できるようにしました。これによって論文間のアンバランスは発生するものの、1号1論文とすることができます。刊行時期を固定しないことで提出ごとに作業に入ることができる、フットワークの軽い媒体となりました。締め切りや入稿直前の、編集委員会による執筆者への連絡や調整という業務負担も減らすことができ、縦組・横組の指定フォーマットにのっとり執筆者にリポジトリへの入稿原稿を作成してもらうことで、外注負担もなくなりました。これらを総合的に勘案し、『なら学研究報告』はウェブオンリーのジャーナルとし、紙媒体を作製しないことにしました。

なぜ、この時期に創刊したのでしょうか。

それは、ひとえに基礎研究や基礎データをきちんと提示・共有するためです。なんらかの発想や応用は基礎データから始まり、その後の議論の重要な土台となるものです。基礎研究なくして学知は成立しません。また、史資料の保管・提示・研究状況に地域差はありますが、県主導による『県史』が発行されていない本県にあって、基礎的な史資料の調査、翻刻、検証と、それを提示して共有できる媒体は必須です。本誌は誌名のとおり、文理を問わず、「なら学」に関するあらゆる論考や史資料が載ることになります。すでに、第1号が5月に刊行されており(前節末尾論文4.参照)、次号も何本か予定されています。リポジトリへのアップロードの際は、なら学研究センターやなら学研究会のウェブサイトでご告知しておりますので、参照ください。

共生 着任の挨拶 【田中 亜季】

2019年10月より共生科学研究センターに非常勤研究員として着任いたしました田中 亜季と申します。大阪府立大学の学部生の頃から博士課程に至るまで、水生昆虫を中心に河川生態学を研究する谷田一三教授の研究室に所属していました。その関係で、長年水生昆虫の研究で有名な奈良女子大学とはご縁があり、東吉野村高見川沿いの東吉野自然環境研究施設にたびたび宿泊させていただいたり、理学部生物科学科一回生対象の夏の水圏生物学野外実習をお手伝いさせていただいたり、数々の貴重な体験をさせていただきました。その奈良女子大学に今回所属させていただくことになり、大変な幸運に感謝しております。着任後早々には、先生方、先輩方によりほぼ準備が完了している状態でしたが、共生科学研究センター共催のシンポジウム「紀伊半島にみる自然と共生 -二ホンオオカミを育む森-」にも携わらせていただきました。ご参加くださった皆様には楽しんでいただけましたでしょうか？



私自身の研究は、水生昆虫よりもさらにサイズの小さい河床間隙生物(多くが1mm以下)を対象に研究してきました。河床間隙生物とは、河床を構成している砂礫と砂礫の間に作り出された隙間に生息している生物のことで、水生昆虫の若齢の他に、ケンミジンコ目、ソコミジンコ目、ミジンコ目、ワムシ類、線虫類、クマムシ、アメーバ類などの多様な分類群が存在しています(図1)。これらの生物は、河床間隙中で有機物の分解や河川内の生産や生物量に大きく貢献しており、河川生態系の重要なメンバーとして近年注目が集まっています。しかし、河床間隙生物は、生息している場所の性質から、河床表層に生息している水生

昆虫と比べ、採集が難しい生物でもありません。博士研究までは、この河床間隙生物を、小さな砂から大きな礫までを含む粒度組成の異なる河床間隙中から、誰でも簡単に採集できると期待されたポンプ採集法の定量性について研究していました。ポンプで連続的に間隙水を揚水すると、多くの場合、その中に含まれる生物個体数が段々と減少しますが、間隙動物の体サイズ、体形、移動方法によっても採集されやすさが異なる採集バイアスがあることが分かりました。定量採集時には、適切な揚水量を選択し現場の群集構成に近づくよう補正する方法を提唱しました。その後は、九州大学と熊本大学を中心とした河川生態学術研究会・菊池川グループによる「流域地質及び河道・氾濫原変化が菊池川水系の河川生態系の構造と機能に及ぼす影響とそれに基づいた河道管理手法に関する研究」に参加させていただき、地質の異なる河川での間隙生物群集の比較を行いました。採集は、河床間隙中に先の閉じたパイプを深く突き刺し、液体窒素を用いてパイプ先端周辺の生物を土砂ごとボール状に凍らせる方法で行いました。大きな礫の卓越する渓流域で広域的に数多く採集しなければならなかったため、この凍結サンプルを間隙中から女性1人でも引き抜ける装置を開発しました。結果、地質により河床間隙中の環境が異なったにもかかわらず、間隙生物の群集構成は地質レベルでは違いがありませんでした。しかし、菊池川水系を中心とした上流域の多様な間隙生物群集を明らかにすることができました。



図1 河床間隙中の多様な生物

今後は、共生科学研究センターでも、紀伊半島の河川をフィールドに間隙生物群集の分布や河川生態系内で果たす役割について、さらに調査を進めていきたいと考えています。また、東吉野村にある共生科学研究センター東吉野分室（旧四郷小）の整備にも、多くの方々にご利用いただける施設になるよう、積極的に取り組んでいるところです。センターの業務は他にもまだまだありますが、先輩方や先生方のお力添えをいただきながら、自身の間隙生物の研究と共生科学研究センターの業務を両輪とし、どちらも最大限前進させて行きたいと考えております。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

共生 東吉野村野外体験実習報告

2019年8月4日～5日に東吉野村で野外体験実習を行いました。今年は、小中学生25名、保護者3名のご参加をいただき、スタッフ17名を加えて、総勢45名で実習を行いました。

1日目は、「川の生き物について学ぼう」、「せっけんをつくろう」、「光が好きな動物、嫌いな動物」と題した3つの実習を行いました。「川の生き物について学ぼう」では、川の流れが速い所と、遅い所で採集された生き物をバットの中で観察し、種類や形にどのような違いがみられるかを学びました。「せっけんをつくろう」では、液体せっけんを固形せっけんに変える実験を行いました。液体せっけんに濃い食塩水を加えると固まりが浮かんできます。その固まりを取り出して固形せっけんを作りました。この実験を通じて、液体せっけんに食塩水を加えると、なぜ固まるのかを学びました。「光が好きな動物、嫌いな動物」の実習では、水生昆虫やウミウシを水槽に入れて片方側だけに光を当て、光から逃げていくのか近づいていくのかを観察しました。

2日目の「森づくりについて学ぼう」では、地元林業家の竹内信市さんに講師をお願いして、樹皮剥ぎ、丸太運びや箸づくりの体験をしました。また、今年の昼食も流しそうめんをして頂き、流れてくるそうめんや色とりどりの野菜、果物に、参加者から歓声が上がりました。

実習中は、大きなケガや病気もなく予定を終えることができ、スタッフ一同ほっといたしました。来年も野外体験実習を開催予定ですので、皆様のご参加をお待ちしております。



実習の様子

古代 第15回若手研究者支援プログラムの報告 【奥村 和美】

2019年度第15回若手研究者支援プログラムは、8月25日（日）・26日（月）に奈良女子大学にて開催されました。今回も、科学研究費基盤研究B「敦煌書儀・六朝尺牘文献の古代日本への受容実態の解明」（代表：信州大学 西一夫）及び科学研究費基盤研究C「日本古代における詩文表現の展開に関する基礎的研究」（代表：淑徳大学 白井伊津子）より共催を得ました。「近世萬葉学」をテーマに、前期国学を代表する一人である契沖（1604～1701）の学問を中心に、賀茂真淵や本居宣長なども含めて近世の萬葉集研究を広く考察し、そのことによって現在の萬葉集研究を相対化する視点をもつことを目指しました。

第1日目は公開講演会として、第2日目はシンポジウムとして開催しました。のべ約140名の参加でした。報告集は2020年3月刊行の予定です。

第1部 公開講演会 8月25日（日）14時～17時30分 80名参加

【講演】

契沖の古典注釈と言語研究

講師：名古屋大学教授 釘貫 亨

萬葉代匠記の思想

講師：京都大学名誉教授 大谷 雅夫

第2部 シンポジウム 8月26日（月）10時～16時30分 56名参加

【研究報告】

契沖の萬葉学と前期国学

報告者：筑波大学非常勤講師 樋口 達郎

契沖の地名研究

報告者：千葉大学准教授 兼岡 理恵

賀茂真淵の萬葉学

報告者：日本大学准教授 高野 奈未

契沖と宣長 それぞれのその後

報告者：関西大学教授 乾 善彦

質疑応答及び全体討議

司会：奈良女子大学教授 奥村 和美



第15回若手研究者支援プログラムの様子

古代 研究会「東大寺大仏殿の再建をめぐる」の報告 【森 由紀恵】

本研究会は、2019年12月21日に「東大寺大仏殿の再建をめぐる」と題し、おもに古代学・聖地学研究センターにおいて定期的に開催されている『大仏殿再建記』（玉井家蔵）を読む会における研究成果発表を目的として開催されました。

『大仏殿再建記』は、奈良女子大学構内に存在した奈良奉行所の与力玉井定時著の元禄～宝永期における東大寺大仏殿再建に関する諸情報を収集した史料で、宗教的行事の記録にとどまらず、建築資材や工法、開眼供養時の奈良町の様子など、近世の東大寺や奈良の様子を多角的にとらえることができる史料です。『大仏殿再建記』を読む会には、奈良女子大学内外から同史料を扱いつつ研究活動を行う有志が集い、史料読解だけでなく、江戸時代の東大寺大仏殿再建に関する様々な研究が行われています。今回の研究会では、この『大仏殿再建記』を読む会での議論などをもとに蓄積された2件の研究成果が報告されました。

宍戸香美氏（古代学・聖地学研究センター協力研究員）の「元禄再建大仏殿大虹梁の引き揚げについて」では、宍戸氏が『大仏殿再建記』中の建築史関係の記述を分析する中で得られた研究成果が報告されました。大仏殿を構成する最重要材の1つで、長さ20メートルを越す巨材の大虹梁が、いかに引き揚げられ構架されたかについて、『大仏殿再建記』の記事をもとに『東大寺大仏殿指図』（堀内家伝来 東京都立中央図書館木子文庫）などの建築史関係の諸資料を検討した結果が示されました。



研究報告の様子

次に、鈴木公成氏（東大寺寺務所職員）の「江戸期東大寺大仏殿再興と島津家」では、大仏殿をはじめとする東大寺寺内で様々な職務にあたられている鈴木氏独自の着眼点からの報告がなされました。報告では、大仏殿内の重要な場に薩摩藩島津家の文化財が遺ることの意味を究明するという問題意識から、東大寺大仏殿再興への島津家の関与の実態が明らかにされ、大虹梁をはじめとする大仏殿の資材の調達・運搬が薩摩藩の林政および薩摩藩と御用商人との密接な結びつきを背景に実現したこと、薩摩藩がこのような大事業に積極的に関わった動機が源頼朝後胤を称する島津家の系譜意識にあったことなどが示されました。

続いて行われた質疑応答では、建築史の専門知識をふまえつつ大虹梁引き揚げの具体的手順が検討され、他藩の大径長大材供給のあり方と島津家の林政との比較から江戸時代の林政史と東大寺大仏殿再建との関連性が検討されるなど、活発な議論がなされました。

本研究会を通じて江戸時代における東大寺大仏殿の再建事業の実態が明らかになり、とりわけ奈良時代以来政治的・宗教的にも重視された東大寺大仏殿が、幕藩体制下特有の社会構造に支えられながら再建されていくさまが示されたことは、宗教都市奈良の歴史的な性格を考える上でも意義深いものとなりました。

なお、本研究会は、科学研究費助成事業（基盤研究C）研究課題名「近世前期の東大寺大仏再建と奈良町北部に関する基礎的研究」2019～2021年度（研究代表者 森由紀恵）の研究成果の一部です。



質疑応答の様子

古代 聖地学・古代学の活動報告 【西谷地 晴美】

平成30年度における聖地学・古代学の活動は、2019年3月3日（日）に第1回聖地学シンポジウム「神々と自然と社会」を、2019年3月16日（土）に第13回都城制研究集会国際シンポジウム「天下の中心としての都城－対外交渉の視点から－」を開催しました。

第1回聖地学シンポジウム「神々と自然と社会」

2019年3月3日（日）13:00～17:00 奈良女子大学E棟108講義室

このシンポジウムでは、21世紀における聖地学が、何を問い、何を明らかにすべきなのかを、「神々」と「自然」と「社会」を重要なキーワードに据えて考えました。

報告題名と報告者は以下の通りです。

「人新世の聖地学」 西谷地晴美（奈良女子大学）

「熊野信仰と鳥」 齊藤恵美（奈良女子大学）

「異界で得られるもの・得られないもの－古代メソポタミアの事例をとおして－」
細田あや子（新潟大学）

第13回都城制研究集会国際シンポジウム「天下の中心としての都城－対外交渉の視点から－」

2019年3月16日（土）10:30～17:00 奈良女子大学N棟202講義室

古代においては、その時々々の政治的課題を解決するため、近隣諸国に使者を派遣することがありました。派遣された使者は、派遣国の王の意図を伝え、また数々の儀式に参加しました。使者の謁見と儀式は、天下の中心であり、王の居住地である都で行われています。この国際シンポジウムでは、外交の場となった都城を「天下」というキーワードから考えました。

報告題名と報告者は以下の通りです。

「外交の場としての日本古代の都城－問題提起として－」
舘野和己（奈良女子大学）

「中国古代都城の設計とそこに現れた天下観」
佐川英治（東京大学）

「新羅の天下観と四方祭祀」
尹善泰（東国大学校）

「ベトナムの都城京と東アジア」
ファム・レ・フイ（ベトナム国家大学ハノイ校）

「日本古代の天下観」
河上麻由子（奈良女子大学）

研究所の活動状況（2019年度）

シンポジウム等

- ◎応用生物無機化学
奈良国際シンポジウム（共生 共催）
「Nara International Conference
on Applied Bioinorganic Chemistry 2019」
日時：2019年6月6日
場所：奈良女子大学F棟506室
- ◎第26回なら学研究会（なら）
『「田原でなら学」
－田原青年層の地域活動と昭和期青年団資料－』
日時：2019年6月16日
場所：奈良市田原公民館 講座室
（奈良市茗荷町1078-1）
- ◎古代学・聖地学研究センター研究会
「大夫合議制の展開と冠位十二階」
日時：2019年6月27日
場所：奈良女子大学S棟329教室
- ◎第15回若手研究者支援プログラム（古代）
「近世万葉学－契沖を中心に－」
第1部 公開講演会
日時：2019年8月25日
第2部 シンポジウム
日時：2019年8月26日
場所：奈良女子大学北棟202教室
- ◎東吉野村×大和・紀伊半島学研究所
連携シンポジウム（研究所/共生 共催）
「紀伊半島にみる自然と共生
－二ホンオオカミを育む森－」
日時：2019年11月23日
場所：東吉野村住民ホール
（吉野郡東吉野村大字小川99）
- ◎研究会（古代）
「東大寺大仏殿の再建をめぐる」
日時：2019年12月21日
場所：奈良女子大学S棟124教室
- ◎第27回なら学研究会（なら）
「私が関わった最近の吉野研究点描
－吉野隅・龍門騒動・群小猿楽座－」
日時：2020年2月23日
場所：奈良女子大学N棟339教室

センター主催セミナー

- ◎2019年度第1回（通算第20回）
共生科学研究センター内セミナー（共生）
酒井 敦（奈良女子大学 研究院自然科学系 教授）
日時：2019年8月9日
場所：奈良女子大学
コラボレーションセンター-Z306室
- ◎2019年度第2回（通算第21回）*
共生科学研究センター内セミナー（共生）
田中 亜季（奈良女子大学 非常勤研究員）
日時：2020年3月17日（予定）
場所：奈良女子大学
コラボレーションセンター-Z306室

地域貢献事業

- ◎小中学生対象「東吉野村野外体験実習」（共生）
日時：2019年8月4日～5日

連携講座等

- ◎県立美術館における連携展示*
「きたまちと奈良女子大学」（なら）
日時：2020年1月25日～3月15日
- ◎県立美術館連携講座（なら）
日時：2020年2月9日、2月26日

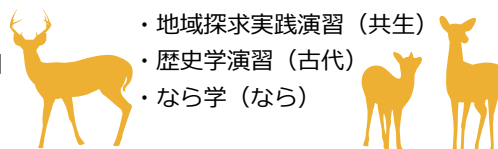
その他

- ◎情報通信規格評価院(IITP・韓国)による社会技術開発
サイト（吉野郡下市町）の視察と懇談実施（なら）
日時：2019年5月10日
- ◎なら学郷土研究者ネットワーク調査（なら）
日時：2020年1月26日
場所：奈良市内藤影堂
- ◎奈良県地域振興部南部東部振興課との共同研究（なら）
日時：2020年1月30日

開講科目

- ・共生科学（共生）
- ・地域探求実践演習（共生）
- ・歴史学演習（古代）
- ・なら学（なら）

*は新型コロナウイルス
(COVID-19) 対応の
ため中止



編集後記

ニューズレターの編集は研究所の一年を思い返す時間ともなります。私の場合、一番印象に残っているのは、2019年11月に東吉野村で実施した研究所の公開シンポジウムです。共生科学研究センターの方が作ってくれたカワイイデザインのスタッフジャンパーを着て、みんなで一緒に裏方作業をした楽しさが昨日のように思い出されます。研究も楽しいが、地域に開かれたシンポジウムと一緒に作っていく楽しさも別格です。研究所シンポジウムは、紀伊半島のいろんな自治体を巡って開催していく予定です。すでに次回が楽しみになってきました。（寺岡）

制作発行 奈良女子大学 大和・紀伊半島学研究所
編集者 狩俣 順也 川根 昌子
榎谷 けい子 寺岡 伸悟
連絡先 〒630-8506 奈良市北魚屋東町
Tel 0742-20-3762
担当事務 研究協力課
URL <http://www.nara-wu.ac.jp/kyi>
E-mail ky-i@cc.nara-wu.ac.jp